

大相撲における学生力士の研究

生沼芳弘

A Study of University Graduates of Japanese Professional Sumo Wrestlers

by

Yoshihiro OINUMA

Abstract

University graduates of professional sumo wrestlers increased rapidly during the past decade, and it came to occupy 6% of the whole of the wrestlers, 36% of the ranking sumo wrestlers (sekitori). This is about 5 times 10 years ago. The success rate that becomes the ranking sumo wrestler of the university graduates is very high with about 60%. Professional sport is considered a kind of show business by Japan, and there is history that it has thought about with money-making impure job. Therefore, the sumo wrestler hasn't been considered the occupation which the person who graduated from the university so far. But, an amateur regulation was stopped from the participation qualification of the Olympic Games in 1974 and the boundary of amateur disappeared with the professional. In other words, amateur collapsed, and a professional became a center as for sport. And, games where the amateur wrestler who graduated from the university did sumo wrestling decreased. A university graduate wrestler has the privilege of "makushita-tukedashi" at the time as the first ring, 77% of them are using this privilege. Professional Sumo Association raises a standard for this privilege and a university graduate wrestler is trying so that it starts from the rookie, too. This privilege threatens a sumo stable as a structure of rookie training school.

はじめに

日本相撲協会は平成13年1月場所から、新弟子検査を新しい規定で実施した。変更点は三つある。一つは、従来の基準「年齢にかかわらず身長173cm 体重75kg以上とする」(第一検査)に満たない者で身長167cm 体重67kg以上の者を対象にした第二検査(体力測定)の実施である。二つ目は、

実績のあるアマチュア相撲出身者の番付地位“幕下付出し”を、従来の一律幕下最下位(幕下61枚目)から実績によって幕下10枚目格と幕下15枚目格の二種類に分けたことである。三つ目は、新弟子検査に「義務教育を終了した23歳未満の男子」という年齢制限ができ、幕下付出しにも次のような年齢制限が付いたことである。「幕下付出しの申請ができる者は、義務教育を終了(中学卒業見

* 1 体育学部体育学科

込みを含む)した25歳未満(申請日時点)の男子とする。」

新弟子検査変更の発端は、小兵の学生力士“舞の海”と27歳で入門した学生力士“智乃花”の入門である。舞の海(昭和43年2月17日生まれ)は日本大学経済学部を卒業する平成2年(1990)3月場所前に新弟子検査を受けたが、身長が170cm足らずで検査に落ちた。いったんは山形県の高校の教員になることが決まったが、どうしても力士の夢が捨てきれずに就職を断って、再度の新弟子検査を次の5月場所前に受ける決意をした。その新弟子検査で、彼は頭のテッペンにシリコンを注入して検査に合格し、全日本学生体重別選手権100キロ未満級優勝の実績が認められ、幕下付出し22歳で初土俵を踏んだ。これ以降シリコンを注入して新弟子検査を受ける者が続出した。

相撲協会は健康を害する危険があるとしてシリコンの使用を禁止し、平成2年7月に「アマチュア相撲で実績のある者は、規定通りの身長と体重がなくても合格させる」ということを理事会で申し合わせた。その後舞の海は、幕下付出し(幕下尻)で6勝1敗、幕下優勝の決定戦に出場、翌9月場所番付は幕下32枚目となり、入門から1年後の平成3年3月場所23歳で十両に昇進、同年9月場所には入幕、平成6年9月場所には26歳で小結になった。平成11年(1999)11月場所を最後に31歳で現役を引退した。現役力士として10年間勤めたが、身長不足を微塵も感じさせない活躍であった。

智乃花(昭和39年6月23日生まれ)は日本大学文理学部を卒業するとき、田中英寿・日大相撲部監督に「お前ならプロでもやれる。行け」と入門を薦められたが、断って山口県の県立高校の教員となった。しかし、平成元年(1989)25歳で全日本相撲選手権に優勝してアマチュア横綱となった。さらに、平成3年相撲部の3年後輩で自分よりもさらに小兵の舞の海が幕内で大活躍していることに刺激された。既に27歳になっていたが「人生は一度きり、あとで後悔するのは嫌だ。いまならまだ後戻りできる」と、妻子を実家に預け、生涯の生活が保障されている教職を辞して立浪部屋に入門し、平成4年(1992)3月場所に幕下付出して

初土俵(6勝1敗)を踏んだ。同年11月場所には28歳で十両に昇進し、妻子と一緒に住める給料が貰えるようになった。翌平成5年7月場所には29歳で入幕し、平成6年(1994)1月場所には小結に上がった。現在、智乃花は十両の現役力士として活躍している。

平成11年(1999)11月場所の学生力士は44名、関取は24名となった。学生力士は力士全体(774名)の6%であるが、学生関取は関取全体(66名)の36%を占めている。舞の海が入門した10年前の平成2年(1990)頃の学生力士は10名、十両以上の学生関取は5名と少なかった。ここ10年で関取は5倍に急増した。本研究の目的は急増する学生力士について、大相撲における学生力士の現状分析と歴史的社会的な分析から、その原因を明らかにすることにある。

I 学生力士の現状

1) 現役の学生力士

平成13年(2001)1月場所、学生力士は中退者(5名)も含めると42名、十両以上の関取は25(幕内15・十両10)名(中退3名)であった。

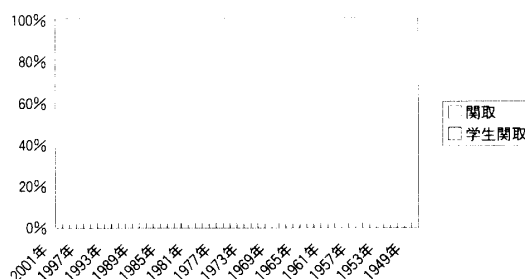


図1 年次別学生関取の場合

全体力士(716名)の中に占める42名は約6%でそれほど多くはないが、十両以上の学生関取25名が関取全体66(幕内40・十両26)名に占める割合は、約38%と大きい(図1。「年次別学生関取の割合」参照)。学生力士42名の大学と所属部屋は、大関3名・前頭(平幕)10名・十両(十枚目)10名・幕下13名・三段目2名・序二段2名、下記の通りである。

大関3名 武双山(専修大学3年中退・武蔵川)、雅山(明治大学3年中退・武蔵川)、出島

(中央大学卒・武蔵川)，

関脇1名 琴光喜 (日本大学卒・佐渡ヶ嶽)

小結1名 栃乃洋 (拓殖大学卒・春日野)

幕内(平幕)10名

追風海 (日本大学卒・友綱)，海鵬 (日本大学卒・八角)，土佐ノ海 (同志社大学卒・伊勢海)，玉春日 (中央大学卒・片男波)，栃乃花 (明治大学卒・春日野)，肥後ノ海 (日本大学卒・三保ヶ関)，浜ノ嶋 (日本大学卒・三保ヶ関)，時津海 (東京農業大学卒・時津風)，玉力道 (明治大学卒・片男波)，朝乃若 (近畿大学卒・若松)

十両(十枚目)10名

玉乃島 (東洋大学2年中退・片男波)，高見盛 (日本大学卒・東関)，皇司 (日本大学卒・入間川)，燐司 (日本大学卒・入間川)，大碓 (同志社大学卒・伊勢海)，若孜 (明治大学卒・松ヶ根)，智乃花 (日本大学卒・立浪)，浜錦 (日本大学卒・追手風)，玉ノ国 (東洋大学卒・片男波)，小緑 (近畿大学卒・阿武松)

幕下13名

朝乃翔 (近畿大学卒・若松)，大翔大 (日本大学卒・友綱)，栃ノ山 (拓殖大学卒・春日野)，栃大揮 (明治大学卒・春日野)，増健 (日本大学卒・三保ヶ関)，柳 (専修大学中退・武蔵川)，武雄山 (明治大学卒・武蔵川)，北勝岩 (日本大学卒・八角)，緑富士 (専修大学卒・阿武松)，田中 (中央大学卒・友綱)，山内 (大東文化大学卒・武蔵川)，田代 (明治大学卒・玉ノ井)，霜鳥 (東京農業大学卒・時津風)

三段目2名 岩木山 (青森大学卒・中立)，玉龍馬 (日本体育大学2年中退・時津風)

序二段2名 一ノ矢 (琉球大学卒・若松)，玉ノ華 (日本大学卒・片男波)

大学別に見ると、多い順に日本大学が14名、明治大学が7名、中央大学・専修大学・近畿大学が各3名、東洋大学・拓殖大学・東京農業大学・同志社大学が各2名、大東文化大学・青森大学・日本体育大学・琉球大学が各1名である。所属部屋(師匠現役力士名)別には、多い順に武蔵川部屋(横綱・三重ノ海)6名、片男波部屋(関脇・玉ノ富士)5名、春日野(横綱・栃ノ海)部屋4名、

三保ヶ関(大関・増位山)・時津風(大関・豊山)・若松(大関・朝潮)・友綱(関脇・魁輝)部屋各3名、八角(横綱・北勝海)・入間川(関脇・栃司)・伊勢海(関脇・藤ノ川)・阿武松(関脇・益荒雄)部屋各2名、佐渡ヶ嶽(横綱・琴桜)・東関(関脇・高見山)・松ヶ根(大関・若嶋津)・立浪(小結・旭豊)・追手風(幕内・大翔山)・玉ノ井(関脇・栃東)・中立(小結・両国)部屋各1名で18の相撲部屋に学生力士がいる。相撲部屋が全部で53部屋であるから、学生力士のいる部屋は34%ということになる。師匠が学生力士であった部屋は、時津風(豊山・東京農業大学)・若松(朝潮・近畿大学)・入間川(栃司・日本大学)・追手風(大翔山・日本大学)・中立(両国・日本大学)部屋である。師匠が学生力士であった部屋の学生力士は、ほとんど師匠の母校からの入門であるが、中立(両国・日本大学)部屋には青森大学の岩木山が入門している。

学生力士の多くは学生時代に全日本相撲選手権大会などで実績を残しているため、幕下最下位の“幕下付出し”で初土俵を踏む。しかし成績を残せなかった者は、他の新弟子と同様に前相撲から始めなければならない。42名のなかで前相撲から始めた者は以下の9名、幕内の栃乃花(明治大学卒)、十両の小緑(近畿大学卒)、幕下の大翔大(日本大学卒)、栃ノ山(拓殖大学卒)、柳(専修大学中退)、緑富士(専修大学卒)、田代(明治大学卒)、三段目の玉龍馬(日本体育大学2年中退)、序二段の一ノ矢(琉球大学卒)である。学生力士が前相撲から取るのは、戦後の全学生力士93名の内21名であり、図2。「年次別学生新弟子数(前相撲・幕下付出し)」からもわかるようにここ10年増加傾向にある。学生力士の77%は、幕下付出しで初土俵を踏む。

2) 幕下付出し

この“幕下付出し”の基準は、舞の海が入門した平成2年(1990)にはなく、師匠である年寄から幕下付出しの申請(推薦)がなされ、理事会の承認で決定されていた。平成4年(1992)3月場所に9名の学生力士の幕下付出し申請が師匠から出され、9名全員が理事会で承認された。この中

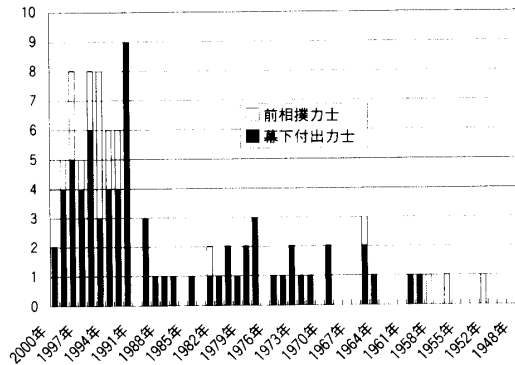


図2 年次別学生新弟子数 (前相撲・幕下付出し)

に27歳の智乃花もいた。図2。「年次別学生新弟子数 (前相撲・幕下付出し)」からもわかるように、これほど多くの学生力士から幕下付出しの申請が出たことは、これまでになかった。このような事態に相撲協会は、下記のような大会実績の基

準と年齢制限を同年7月場所からI，平成5年1月場所からII，平成13年1月場所からIIIを適用するようになった。大会成績の基準は，I・II・IIIとだんだん高くなっており，昨年は幕下付出しの特典を得た学生力士は2名であった。

〈幕下付出しの適否判定の基準〉

I (平成4年7月場所より適用)

全日本相撲選手権大会—16位以上の成績

- ・全日本学生相撲選手権大会
- ・全日本実業団相撲選手権大会
- ・国民体育大会成年A
- ・東日本学生相撲選手権大会
- ・西日本学生相撲選手権大会

優勝または3位以上の成績が2回以上の者

申請時の直前二ヵ年の成績による。

申請のできる者は，25歳未満の男子とする。

II (平成5年1月場所より適用)

幕下付出しの申請のできる者は，高校卒業の者は除外する。

満20歳より25歳未満の男子とする。(改正以前は25歳未満)

幕下付出しに相応する成績は次の四大会にする。

全日本相撲選手権大会—16位以上の成績

- ・全日本学生相撲選手権大会
- ・全日本実業団相撲選手権大会
- ・国民体育大会成年A

優勝または3位以上の成績が2回以上の者

III (平成13年1月場所より適用)

- ①下記の四大会のうち「全日本相撲選手権大会」で優勝し、かつ他の三大会のいずれか一つに優勝したものは「幕下10枚目格」に付け出す。
 - ・全日本相撲選手権大会
 - ・全日本学生相撲選手権大会
 - ・全日本実業団相撲選手権大会
 - ・国民体育大会成年 A
- ②上記四大会のいずれか一つの大会で優勝した者は「幕下15枚目格」に付け出す。
- ③判定基準となる優勝は、優勝日から一年以内のものに限る。
- ④上記該当者は健康診断による合否判定のみを実施する。その他の者は前相撲から
- ⑤申請ができる者は、義務教育を終了（中学卒業見込みを含む）した25歳未満（申請日時点）の男子とする。

上記の「幕下付出しの適否判定の基準」の改訂によって、舞の海のような実績のある小兵の学生力士の身長と体重を問われることがなくなったが、年齢制限（義務教育を終了した25歳未満の男子）によって智乃花のように27歳で初土俵ということはなくなった。

II 戦前の学生力士

戦前の学生力士は、山錦（関西大学中退）・笠置山（早稲田大学）・春雷（明治大学）・奄美島（明治大学）・山口（早稲田大学）の5名である。山錦は大正6年（1917）に前相撲で初土俵を踏み小結まで上がり、昭和7年（1932）の春秋園事件で新興力士団に加わり相撲協会を脱退した。一方、笠置山は春秋園事件直後の昭和7年2月場所に幕下尻（幕下最下位）で初土俵を踏み、入幕して関脇まで上がった。春雷・奄美島・山口は3人とも昭和14年（1939）5月場所に幕下尻で初土俵を踏んだが、十両に上がれなかった。ここでは、最初の学生力士で前相撲が初土俵の山錦、そして幕下尻（現在の幕下付出し）が初土俵の笠置山、両者のライフコースを紹介する。

山錦は明治31年（1898）4月17日大阪市大淀区大淀町に生まれ、本名は山田善次郎である。関西大学相撲部に所属し活躍していたが、同郷の先輩である第26代横綱大錦を慕って大学を中退し、第

19代横綱常陸山の出羽海部屋に大正6年（1917）5月場所19歳で入門した。彼の初土俵年齢19歳は、この時代では早いほうではないが遅くもない（筆者の算定によれば当時の初土俵年齢は平均が18か19歳であった）。彼は番付最下位の前相撲で初土俵を踏み、次の大正7年1月場所は西序ノ口26枚目の番付地位で2勝2敗1預であった。この五分の戦績からすれば、彼の番付地位は実力にふさわしい。当時のアマチュア相撲と大相撲の実力の違いが理解できる。その後、毎場所勝越して3年（年2場所）で序二段・三段目・幕下と上がって、大正11年（1922）1月場所23歳で十両に昇進、十両も1年2場所通過し、大正12年（1923）1月場所24歳で入幕した。当時の幕内力士の初土俵から入幕までの通過年数が7－8年であるから、彼の5年は早いほうである。大正15年（1926）1月場所27歳で小結に昇進、翌昭和2年（1927）3月場所の東西優勝争いでは、東方85点对西方97点で西方が優勝、西方の山錦が横綱・大関を除く力士の中で西方の最高成績力士であったので28歳で優勝旗手になった。昭和2年10月場所29歳で関脇に昇進した。昭和5年（1930）5月場所32歳の時、前頭5枚目で11戦全勝の平幕優勝、昭和7年（1932）33歳のとき春秋園事件で新興力士団に加わり、大相撲を脱退した。その後、新興力士団で相撲を取り続け、昭和12年（1937）8月39歳で現

役を引退、現役を21年間勤めた。幕内在位29場所、幕内成績155勝132敗1痛分3預15休、勝率54%であった。現役引退後は大阪で「山錦旅館」を経営、昭和47年（1972）5月27日74歳で亡くなった。

笠置山は、明治44年（1911）1月7日奈良県大和郡山市高田町に生まれ、本名は仲村勘治である。昭和7年（1932）早稲田大学在学中の21歳で出羽海部屋に入門、春秋園事件で1月場所が開催できず延期となった2月場所に、番付外幕下格（幕下尻）で初土俵を踏んだ。この場所の戦績は4勝3敗、翌3月場所同じ番付地位で7勝3敗、5月場所では幕下9枚目に上がり7勝4敗、9月場所も7勝4敗、昭和8年（1933）1月場所22歳で十両に上がった。十両で2場所負け越して、幕下筆頭に陥落、幕下で勝越して1場所で十両へ復帰、昭和10年（1935）1月場所24歳で十両優勝、同年5月場所に入幕した。初土俵から入幕まで3年は早い（当時は平均7年であった）。昭和12年（1937）1月場所26歳で関脇に昇進、昭和16年（1941）1月場所に30歳で優勝旗手を勤めた。昭和20年（1945）双葉山が引退した同じ11月場所に34歳で現役を引退した。学士の頭脳が買われて出羽一門では双葉山攻略の参謀であったが、双葉山には一度も本場所で勝てなかった。幕内在位22場所、幕内成績134勝139敗10休、勝率49.1%であった。現役引退後は年寄秀ノ山を襲名し、出羽海部屋の部屋付年寄として協会のスポークスマンを務め、昭和46年（1971）8月11日60歳で亡くなった。

戦前の学生力士の春雷・奄美島・山口は、3人とも昭和14年（1939）五月場所に幕下尻で初土俵を踏んだ。明治大学の春雷と奄美島は武隈部屋、早稲田大学の山口は出羽海部屋へ入門した。初土俵の成績は、春雷4勝3敗、奄美島1勝6敗、山口0勝2敗5休であった。次の場所の番付地位と成績は、春雷が西幕下43枚目で4勝4敗、奄美島が西序二段79枚目で7勝1敗、山口は初土俵だけで廃業しているので番付には一度も載らなかった。その後は、春雷が昭和16年（1941）5月場所西幕下14枚目を最後に廃業、奄美島も翌昭和17年1月場所西幕下26枚目を最後に廃業、両者とも軍隊に入営している。

以上、戦前の学生力士は5名と少ない。これは

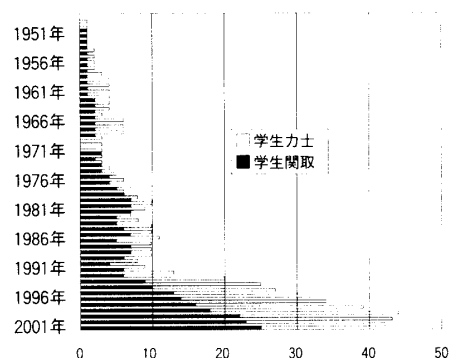


図3 年次別学生力士・学生関取

戦前の大学生自体が少ないこともあるが、アマチュアの相撲と大相撲の間にかかなりの実力差があった為であると考えられる。現在、学生力士の三分の一を占める日本大学は、戦前の力士にはいなかった。日本大学の学生力士は昭和45年1月場所入門の輪島（第54代横綱）が最初である。

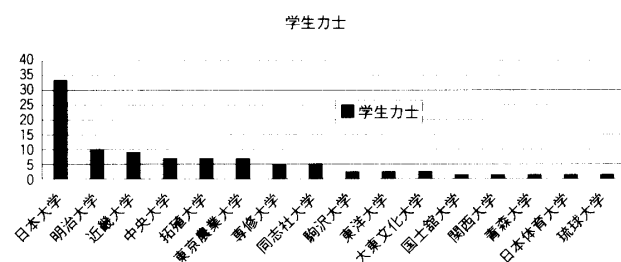


図4 大学別学生力士数

III 戦後の学生力士

戦後から20世紀最後（2000年）までの学生力士は93名、年次別学生新弟子数は図2。「年次別学生新弟子数（前相撲・幕下付出し）」の通りであり、図3.は「年次別学生力士・年次別学生関取」（各年1月場所）である。93名の出身大学は、日本大学34名、明治大学10名、近畿大学9名、中央大学・拓殖大学・東京農業大学各7名、専修大学・同志社大学各4名、駒沢大学・東洋大学・大東文化大学各2名、国土館大学・関西大学・青森大学・日本体育大学・琉球大学各1名である（図4.「大学別学生力士数」参照）。現役の学生力士42名については前で述べたので、ここでは現役を引退した学生力士51名について述べることにする。

現役を引退した学生力士51名の入門した部屋は、出羽海部屋8名、時津風部屋7名、花籠部屋6名、立浪部屋5名、春日野部屋4名、高砂・佐渡ヶ嶽・若松・武蔵川・八角各2名、井筒・伊勢海・北の湖・二所ノ関・玉ノ井・松ヶ根・入間川・宮城野・三保ヶ関・二十山・片男波部屋各1名、計16の部屋であった。

横綱になった学生力士は輪島（第54代横綱）1名、大関が豊山・朝潮2名、関脇が荒勢・出羽の

俵、平成10年1月場所に十両に上がり、平成13年1月場所に廃業している。前相撲から始まる学生力士は十両になるまでに北勝光が3年、栃葉山が4年かかっている。前相撲からの学生力士の平均現役年数は4.4年で、番付最高位は以前は幕下であったが、最近は三段目で終わる学生力士が増えた。

戦後の学生力士51名の内39名が、幕下付出しで初土俵を踏んでいる。この“幕下付出し”が、幕

表1 前相撲の学生力士

力士名	部屋	出身校	初土俵年月	最終年月	最高位
南研山	出羽海	東京農大	昭和 28/5	昭和 36/3	幕下 3
北海	出羽海	拓殖大学	昭和 32/9	昭和 40/5	幕下 1
千里岩	立浪	関西大学	昭和 34/1	昭和 39/1	幕下 5
栃葉山	春日野	明治大学	昭和 41/1	昭和 46/9	十両 9 昭和 45/11
若八嶋	松ヶ根	中央大学	平成 5/1	平成 9/7	幕下 16
朝井	宮城野	近畿大学	平成 5/1	平成 8/5	幕下 11
成松	三保ヶ関	日本大学	平成 6/1	平成 10/1	幕下 49
長田山	立浪	明治大学	平成 6/1	平成 7/7	序ノ口 1
北勝光	八角	日本大学	平成 7/1	平成 13/1	十両 10 平成 10/1
龍天山	二十山	大東大中退	平成 7/9	平成 11/5	三段目 3
玉乃龍	片男波	国士館大	平成 8/5	平成 11/5	三段目 3
朝大牙	若松	近畿大学	平成 10/1	平成 12/1	三段目 44

花・舛田山・栃司・栃乃和歌5名、小結が豊国・豊山・両国・大翔鳳・舞の海5名、前頭（平幕）が吉井山・大ノ海・天ノ山・服部・久島海・大翔山・大輝煌・大日ノ出8名、十両までは太刀光・栃葉山・花嵐・市ノ渡・隆濤・武哲山・大倭・北勝光・出羽平の9名、計30名が関取となり21名が関取になれなかった。関取となる確率は59%である。現役の学生力士42名の内、十両以上の関取は経験者を含めると28名であるから、関取となる確率は67%で、現在の学生力士のほうが関取となる確率が高い。

現役を既に引退した学生力士51名の中に、前相撲から始めた力士が12名（表1、「前相撲の学生力士」参照）いた。その中で十両以上の関取となった力士は、栃葉山（明治大学）と北勝光（日本大学）の2名、両者とも十両までであった。栃葉山は昭和41年（1966）1月場所が初土俵、昭和45年11月に十両に上がり、翌昭和46年9月に廃業している。北勝光は平成7年（1995）1月場所が初土

表2 昭和20年の終戦から昭和41年までの幕下付出しの学生力士

力士名	出身大学	部屋	初土俵年月	初土俵地位	初土俵成績	次場所地位	次場所成績
吉井山	拓殖大学	出羽海	昭 23/5	幕下 16 格	4勝2敗	西幕下 6	4勝2敗
豊国	中央大学	時津風	昭 35/5	幕下 反格	8勝0敗	西幕下 9	5勝2敗
豊山	東京農大	時津風	昭 36/3	幕下 10 格	5勝2敗	西幕下 7	5勝2敗
神光	中央大学	井筒	昭 40/5	幕下 反格	5勝2敗	西幕下 73	5勝2敗
太刀光	拓殖大学	高砂	昭 41/1	幕下 50 格	5勝2敗	西幕下 33	3勝4敗
山田山	東京農大	時津風	昭 41/3	幕下 50 格	2勝5敗	幕下二段 50	7勝0敗

下最下位（幕下尻）となるのは昭和41年（1966）4月に「幕下の付出しは今後幕下最下位から取る」とが理事会の申し合わせ事項となってからである。それまでの幕下付出しは、師匠の推薦によってその地位が決められ、各場所の初日取組編成会議の席上決定していた。こうして幕下付出しで初土俵を踏んだ力士の成績が、4勝3敗以上の勝越しなら他の力士同様に昇進する。しかし、逆に負け越した場合は、3勝4敗は三段目、2勝5敗と1勝6敗（前述戦前の奄美島の例）は序二段、全敗なら序ノ口へ降下することが慣習となっていた。「昭和20年の終戦から昭和41年までの幕下付出しの学生力士」は表2. の6名である。

太刀光まで戦後の幕下付出しの学生力士5名は、順調に初土俵で勝ち越してきた。ところが、昭和41年3月場所に幕下50枚目格に付出された時津風部屋の山田山が、2勝5敗で負け越したので、前述（戦前）の慣例により序二段に降下され、序二段で7勝0敗であった。これはちょっと落としすぎではないかということになり、番付編成要領に新しく次のように付け加えられた。「付出し力士は、幕下最下位とし、その成績による次場所の位置は、本場所の勝星によりその階級順位を決める」これによって、幕下付出しはこれまで通り師

匠の推薦があれば認められるが、豊山（現時津風理事長）のような幕下10枚目格はなくなり、全て幕下尻（幕下最下位）となった。また、山田山のように負け越して序二段に下がることもなくなった。

1970年に輪島が入門してから2000年までの31年間に、現役力士も含めて66名の学生力士が大相撲に入門し、幕下付出しで初土俵を踏んでいる。この初土俵で7戦全勝は、輪島・朝潮・武双山・海鵬・雅山5名、6勝1敗21名、5勝2敗21名、4勝3敗11名、3勝4敗6名、2勝5敗2名であった。中央値は5勝2敗、平均値は5.03勝であった。負け越した者が1割強（12%）いた。負け越した者は、入門順に出羽の花3勝4敗・花ノ藤3勝4敗・両国2勝5敗・大嵐3勝4敗・朝頼3勝4敗・玉ノ華3勝4敗・栃大揮2勝5敗・北勝岩3勝4敗である。

山田山の後3年間、学生力士の入門はなかったが、昭和45年（1970）1月場所に2年連続学生横綱となった日本大学の輪島（昭和23年1月11日生まれ）が花籠部屋に入門し、幕下付出し22歳で初土俵を踏んだ（当時の幕内力士の平均初土俵年齢は16.1歳であった）。初土俵は7戦全勝、次の3月場所も7戦全勝で幕下2場所連続優勝、次の5

表3 幕下付出しで出発して十両に上がれなかった学生力士

力士名	部屋	出身校	初土俵年月	最終年月	最高位
神光	井筒	中央大学	昭和40/5	昭和43/9	幕下13
山田山	時津風	東京農大	昭和41/3	昭和44/7	幕下20
佐々木	時津風	近畿大学	昭和48/3	昭和49/11	幕下13
大海	花籠	駒澤大学	昭和53/3	昭和55/1	幕下34
零花田	佐渡ヶ嶽	日本大学	昭和54/3	昭和56/5	幕下21
零藤沢	佐渡ヶ嶽	同志社大学	昭和54/9	昭和55/11	幕下2
淵田	北の湖	日本大学	昭和62/3	平成4/5	幕下3
大嵐	二所ノ関	専修大学	平成4/1	平成6/11	幕下27
朝頼	若松	近畿大学	平成4/3	平成7/9	幕下20
北勝森	八角	日本大学	平成6/1	平成10/3	幕下11

月場所十両に昇進、十両は4場所（7月場所だけ7勝8敗の負け越し）、昭和46年1月場所23歳で入幕（当時の入幕年齢は22.1歳）、昭和47年11月場所には24歳で大関、昭和48年7月場所には25歳

表4 十両まで上がった学生力士

力士名	部屋	出身校	初土俵年月	十両昇進年月	最終年月
太刀光	高砂	拓殖大学	昭和41/1	昭和45/3	昭和45/11
栃葉山	春日野	明治大学	昭和41/1 前相撲	昭和45/11	昭和46/9
花嵐	花籠	日本大学	昭和55/3	昭和59/3	昭和60/11
市ノ渡	時津風	東京農大	昭和57/3	昭和58/3	平成元/9
隆涛	玉ノ井	拓殖大学	平成4/5	平成6/3	平成11/1
武哲山	武蔵川	中央大学	平成5/1	平成6/7	平成10/7
大倭	入間川	日本大学	平成5/3	平成6/1	平成8/11
北勝光	八角	日本大学	平成7/1 前相撲	平成10/1	平成13/1
出羽平	出羽海	日本大学	平成9/3	平成10/5	平成12/5

で第54代横綱に昇進した。初土俵から3年5ヶ月で横綱に昇進した。昭和56年（1981）3月場所に

表5 入幕した学生力士

力士名	部屋	出身校	初土俵年月	入幕年月	最終年月	最高位	年寄名
吉井山	出羽海	拓殖大学	昭和23/5	昭和24/9	昭和35/3	前頭11	阿武松
豊国	時津風	中央大学	昭和35/5	昭和36/11	昭和43/1	小結	
豊山1	時津風	東京農大	昭和36/3	昭和37/1	昭和43/9	大関	時津風
輪島	花籠	日本大学	昭和45/1	昭和46/1	昭和56/3	横砂	花籠
豊山2	時津風	東京農大	昭和45/3	昭和46/11	昭和56/5	小結	湊
荒勢	花籠	日本大学	昭和47/1	昭和48/7	昭和56/9	大関	間垣
出羽の花	出羽海	日本大学	昭和49/3	昭和52/11	昭和63/1	関脇	出来山
舩田山	出羽海	拓殖大学	昭和49/3	昭和51/11	平成元/7	関脇	千賀ノ浦
大ノ海	花籠	日本大学	昭和50/3	昭和52/1	昭和52/7	前頭4	
天ノ山	時津風	駒澤大学	昭和51/3	昭和53/3	昭和61/11	前頭1	
朝潮	高砂	近畿大学	昭和53/3	昭和53/11	平成元/3	大関	若松
栃司	春日野	日本大学	昭和56/3	昭和58/9	平成4/5	関脇	入間川
服部	伊勢ノ海	同志社大学	昭和58/3	昭和60/3	昭和62/7	前頭3	
栃乃和歌	春日野	明治大学	昭和60/3	昭和62/1	平成11/7	関脇	竹嶋
両国	出羽海	日本大学	昭和60/3	昭和62/3	平成4/11	小結	中立
久鳥海	出羽海	日本大学	昭和63/1	平成元/7	平成10/9	前頭1	田子ノ浦
大翔山	立浪	日本大学	平成元/1	平成2/9	平成7/11	前頭2	出来山
大翔鳳	立浪	日本大学	平成2/1	平成3/7	平成11/5	小結	
大輝雄	武蔵川	近畿大学	平成2/3	平成3/1	平成5/5	前頭15	
舞の海	出羽海	日本大学	平成2/5	平成3/9	平成11/11	小結	
大日ノ出	立浪	日本大学	平成4/1	平成11/3	平成12/9	前頭9	

33歳で現役を引退、現役10年間の記録は幕内在位62場所、620勝213敗85休、勝率74.4%、優勝14回であった。現役引退後は花籠部屋を継いだ。昭和60年一身上のトラブルから廃業、プロレスラーとなった。

現役を引退した51名の学生力士の中で、「幕下付出しで出発して十両に上がれなかった者」は10名、表3.の通りである。彼らの現役年数は平均2.6年であり、全員が幕下上位まで上がっている。「十両まで上がった学生力士」が9名（表4.）、前相撲から上がってきた栃葉山と北勝光を除外して、彼らの幕下付出しから十両昇進までに要した年月は2年、現役年数の平均は4.9年であった。「入幕した学生力士」21名は表5.の通りである。幕下

付出しから入幕まで1年以下の力士は豊山①・輪島・朝潮・大輝煌の4名である。豊山①は幕下3場所十両2場所、輪島は幕下2場所十両4場所、朝潮は幕下2場所十両2場所通過した。大輝煌(武蔵川部屋)は幕下4場所十両1場所入幕、入幕した場所で怪我をし、幕下に落ち廃業した(表参照)。現役を引退した学生力士の中では朝潮が最短で入幕した。現役力士の中では武双山と雅山が朝潮と同じ幕下2場所十両2場所入幕している。幕下2場所を連続優勝して十両に上がったのは輪島と現役の武双山と雅山の3名だけである。入幕まで1年から2年未満の力士が吉井山・豊国・豊山②・荒勢・大ノ海・栃司・栃乃和歌・久島海・大翔山・大翔鳳の10名(表参照)、ちょうど2年の力士が天ノ山・服部・両国の3名、2年から3年までの力士が出羽の花・舂田山・栃司の3名、大日ノ出だけが7年かかった。両国と出羽の花が幕下付出しの初土俵を負け越した力士である。学生力士の初土俵から2年以内に入幕するのが81%である。前相撲からの力士の平均入幕所要年数が約6年であるから、これと比較すると学生力士は4年早いことになるが、大学4年間相撲部で稽古したことを考えれば同じである。しかし、最近では武双山や雅山のように、幕下付出し申請の基準を満たすとすぐに、大学を中退して入門する例が見られるようになった。

21名の現役年数は、糖尿病で大相撲を2年で廃業しプロレスに転向した大ノ海から、15年間現役を勤めた舂田山までおり、平均は9.1年であった。他の幕内力士の平均現役年数が14.8年であるから、

学生力士の現役年数は5.7年短いことになる。現役引退時に年寄を襲名した学生力士は13名(表5、「年寄名」参照)、戦後の学生力士の25%、学生幕内力士の62%である。彼らの平均現役年数は10.6年である。年寄となった学生力士の現役年数が長いのは引退相撲(現役引退年寄襲名披露大相撲)と関係があり、これを国技館で開催できる力士は、「十両以上の関取を30場所以上勤めた力士」という力士会の規定があるからである。一年6場所であるから30場所は5年間ということになる。“関取を30場所”できる力士はそれほど多くはない。

IV 新弟子第二検査(体力測定)

平成13年(2001)1月場所から相撲協会は、舞の海のような多彩で且つ個性的な小兵力士を養成するために、従来の体格基準である第一検査(身長173cm 体重75kg以上)に満たない志願者に第二検査(体力測定)を実施することになった。第二検査の体格(身長・体重)の下限は167cm・67kgである。この根拠は、厚生省のデータから中学卒業時の男児14歳から17歳にかけて5.4cmの身長が増加が見込まれるので、検査時の身長を167cm以上とした。体重については、過体重者だけでなく、正常体重域も入る体重として67kg以上とした。体力測定は以下の8項目である。

- ①背筋力(最大筋力) ②ハンドボール投げ(最大筋力) ③握力(最大筋力)
④上体おこし(筋持久力) ⑤垂直とび(瞬発力)
⑥反復横とび(俊敏性) ⑦50m走(走力) ⑧シャトルラン(心肺持久力)

表6 体力評価基準表

得点	背筋力	ハンドボール	握力	上体おこし	垂直とび	反復横とび	50m走	シャトルラン
10	178以上	37m以上	56kg以上	35以上	64cm以上	63回以上	6.6秒以上	125回以上
9		34~36	51~55	33~34		60~62	6.7~6.8	113~124
8	144~177	31~33	47~50	30~32	54~63	56~59	6.9~7.0	102~112
7		28~30	43~46	27~29		53~55	7.1~7.2	90~101
6	108~143	25~27	38~42	25~26	43~53	49~52	7.3~7.5	76~89
5		22~24	33~37	22~24		45~48	7.6~7.9	63~75
4	72~107	19~21	28~32	19~21	33~42	41~44	8.0~8.4	51~62
3		16~28	23~27	16~18		37~40	8.5~9.0	37~50
2	71kg以下	13~15	18~22	13~15	32cm以下	30~36	9.1~9.7	26~36
1		12m以下	17kg以下	12回以下		29回以下	9.8秒以上	25回以下

表7 現役力士の体力測定結果および得点

得点	背筋力	ハンドボール	握力	上体おこし	垂直とび	反復横とび	50m走	シャトルラン	合計得点
18歳以上に適用									
中間値(50%) (得点)	149kg(8)	26.3m(6)	42kg(6)	25回(6)	44.5cm(6)	37回(3)	8.8秒(3)	37回(3)	28
	平均(7)								
18歳未満に適用									
下から30%の値 (得点)	137.9kg(6)	20m(4)	42kg(6)	23回(5)	41.5cm(4)	37回(3)	9.0秒(3)	37回(3)	23
	平均(5)								

表8 新弟子第二検査合格者

氏名	身長	体重	年齢(歳)
a	169cm	89kg	16
b	171cm	100kg	15
c	169cm	96kg	15
d	170cm	97kg	15
e	180cm	69kg	15
f	178cm	68kg	19
g	167cm	69kg	22
h	171cm	97kg	18
i	171cm	72kg	18
j	172cm	73kg	15
k	167cm	81kg	17
l	170cm	86kg	15
m	171cm	91kg	15

第二検査合格者の体力基準は18歳未満が8項目(①背筋力・②ハンドボール投げ・③握力は3項目の平均値)の合計が23点以上、18歳以上は合計28点以上が合格ラインである。この点数は、16歳から24歳までの少なくとも一年ないしは数年の稽古や土俵の経験を積んでいる現役小兵力士32名の体力測定結果に基づいている。つまり、その測定結果を「体力評価基準表」(表6. 参照)で点数化し、現役小兵力士32名の下から30%が23点、中間値(50%)が28点であった(表7. 「現役力士の体力測定結果および得点」参照)。体力評価基準表は得点5を標準としているので、現役力士は最大筋力・筋持久力・瞬発力では標準を上回っているが、俊敏性・走力・心肺持久性では標準を下回っている。

平成13年(2001)2月21日初めての第二検査が両国国技館で行われ、17名が受検を申請した。1名は第一検査の体格基準を満たしていることが判明したので受検を辞退した。結果は3名が不合格、

表8. 「新弟子第二検査合格者」の13名が合格した。合格者の身長・体重・年齢は表8. のとおりである。年齢は15歳が7名、18歳2名、16歳・17歳・19歳・22歳各1名である。身長 of 足りない者8名、体重 of 足りない者2名、身長と体重の両方足りない者3名であった。

智乃花が入門するまでの新弟子検査は、身長と体重の体格規定だけで年齢は問われなかった。しかし、前述Iの時(平成4年7月場所)から「義務教育を終了した20歳未満の男子」となった。その後これでは、前相撲から始める学生力士が、大学を卒業して入門できないので、前述IIの時(平成5年1月場所)に「義務教育を終了した23歳未満の男子」となり現在にいたっている。

まとめ

今から約10年前、大相撲に舞の海と智乃花が入門して以来、多くの学生力士が大相撲の世界に入って来るようになった。この十年間に、本研究で明らかにしたように新弟子検査や幕下付出しの基準が大きく変化した。学生力士の大相撲に与えたインパクトは、非常に大きいものであったと言える。

では何故このように学生力士がここ十年間に急増したのであろうか。大相撲の力士は、大学を卒業した学士が就く職業とは従来考えられてこなかった。日本ではスポーツが体育として、学校や企業を中心にアマチュアとして発展してきた。そのため、大相撲などのプロスポーツは、一種の興行とみなされ金儲けの不純なものと考えられてきた。1936(昭和11)年に日本職業野球連盟が発足したとき、そこに参加し大卒の選手たちが、大学野球のOB会から除名処分を受けたというのは、その

象徴的な出来事といえる。^{#1)}また、大学進学率の上昇によって約半数の高校卒業生が大学（含む短大）へ進学するようになり、学士（準学士）の価値の低下も一因と考えられる。

もう一つの原因は、アマチュアの崩壊である。1974年アマチュアスポーツの祭典であるオリンピックの参加資格からアマチュア規定が消えてから27年が経過し、スポーツはプロが中心となった。学生相撲の力士たちは、大学卒業後に相撲をしたくても企業の相撲部が減少しており、アマチュア相撲の環境が崩壊している。そのため、彼らはプロの大相撲に入門しなければ、相撲を続けることができないのが現状である。

学生相撲出身の力士の特典である「幕下付出し」は、前にも述べたようにその基準がだんだん高くなっている。平成13年より適用された基準Ⅲでは、舞の海・智乃花ばかりでなく出島・雅山も幕下付出しの資格を得ることができなくなる。平成13年は9月場所を終了した時点で、学生力士が3名入門したが、幕下付出しの特典を得た者は1名だけで（図2．参照）、2名は前相撲からの出発である。前にも述べたように、プロの大相撲とアマの学生相撲の実力差は接近しており、学生力士の成功率は高い。しかし、大相撲は学生相撲出身力士の特典である「幕下付出し」を規制して、

大相撲社会の伝統である番付階級制度を守るために、学生力士も前相撲から始めさせようとしている。

筆者の調査によれば、今から150年前の幕末の嘉永3年（1850）の幕内力士23名の中で12名が二段目（現在の幕下）付出しで、1名は幕内付出しであり、半分以上の幕内力士が付出しで初土俵を踏んでいる。従って、当時の初土俵年齢は約23歳であった。^{#2)}江戸時代の幕内力士の初土俵年齢が高いのは、江戸・大阪・京都以外の日本の各地に相撲団があり、力士は先ず地方の相撲団に入門し、そこで強くなった者だけがプロの大相撲にやってきたからである。また、付出し力士が多いことから、江戸時代の相撲部屋には新弟子養成機関としての機能は少なかったと考えられる。^{#3)}幕下付出しの学生力士が増えると、大相撲を支えている新弟子養成機関としての相撲部屋の存在基盤が崩壊するからである。

引用文献

- 注1) 玉木正之, NHK 人間講座「日本人とスポーツ」p79, 日本放送出版会, 2001
注2) 生沼芳弘, 「相撲社会の研究」p227, 不昧堂, 1994
注3) 同, p310